「智慧」と「叡智」　―ダチョウを飼育して、全校生で頂く―

　笠田高校で教務主任を命じられて２年目、４０歳の時であったと思う。その日はいつにも増して精神的に参っていたのだろう。そんな時はいつも、高瀬高校で２・３年時の担任で、３年間英語を教わった牧忠雄先生を訪ねて元気をもらっていた。その日も気が付けば、牧先生宅へ向かっていた。

「先生、居るな。来たぜ」

私は玄関を開けて、いつものように挨拶した。

「おお、来たか。長いこと来んかったやないか」

これが先生の私を迎えてくれるいつもの決まった言葉だった。

色々と私の仕事上の愚痴を聞いてくれていた先生が突然私に指示した。

「ここへ「ちえ」と書いてみい」

私は「知恵」と書いた。

「小野もそう書いておるんか。それは間違いではないが、正しくない」

と言いながら、「智慧」と書いてくれた。

「知恵」と書くようでは、本当の「智慧」は浮かばんじゃろが、と言われた。

「それじゃ、もう一つ、「えいち」と書いてみい」

私は、「英知」と書いた。

「小野もそう書くんか。それは近頃のアホが書く字やないか」

「ああ分かった。「比えい山」の「えい」に「ちえ」の正しい「智」を書くんやろ。「えい」は読めるけど書けんわ」

「ト、ワ、一、人（の）目、又」（とわいちはひと（の）めまた）と覚えておくと忘れへん」

それを聞いて、私は言いながら早速書いてみた。

「これからは正しい「えいち」（叡智）を書くようにしたら、困った時に叡智が出てくるようになるぞ」

　家へ帰って、新しく手に入れた新明解国語辞典・第３版（三省堂）（昭和５４年１１月２０日発行）を開いてみた。

ちえ【知恵】〔正しくは「智慧」〕物事の道理がよく分かり、判断・処理がうまく出来る能力。

えいち【叡知】〔正しくは「叡智」〕物事の本質を見通す、深くすぐれた知性。「―を・集める

　　（編集する・絞る）〔「英知」とも書く〕

牧先生は私に、「自分の頭で考えて智慧を絞り出し、叡智を働かせよ」と、諭してくれたんだと納得した。

以来、「ちえ」と漢字で書く時は、頭の中で「智慧」を思い浮かべて「知恵」と書いている。「えいち」も同様に漢字で書く時には、頭の中で「叡智」を思い浮かべて「英知」と書いている。

高校教師の最後は、多度津水産高校で２年、農業経営高校で４年、校長として在職した。その６年間で、自分なりに知恵を絞り、英知を働かせて問題を解決することが出来た数例について書きたい。

多度津水産高校へ平成６年４月１日に赴任した。新学期が始まったばかりの朝、職員室へ行くと、教頭がえらい丁寧な言葉で謝りながら電話の応対をしている。電話が終わって、私は訊いた。

「その電話、どこの誰からや」

「多度津警察署の署長さんからです。今朝、火の点いたたばこを署長官舎へ何本も放り込まれたとの苦情の電話です」

「そら、放り込んだ生徒を集めて、しっかりと注意せないかんやないか」

「いくら注意しても止めないんです」

「先生方が注意しても止めないとか。分かった。ちょっと多度津署へ行って来るわ」

初対面の署長さんに、厚かましくも、無理なお願いをした。

「私は４月１日付で水産高校へ校長として着任した小野健一と申します。教頭から聞きました。明日の朝も多分集団で放り込むでしょう。最初に放り込んだ生徒を捕まえて、午後５時まで、警察で指導して頂けないでしょうか」

署長は、「学校はそれでいいのですね」と念押しされて、承知してくれた。放り込みはぴたっと止まった。

１学期の期末試験が終わって、水産科の幹部の先生方が校長室へやって来た。

「ここ数年中止していた海岸寺での遠泳訓練を実施したいとお願いに来ました」

「そら、やったらええが。しっかりとした計画を作れよ。楽しみじゃのう」

当日、整列した生徒を見て驚いた。見学者がやけに多い。３分の１近く居たかもしれない。これは大方が横着者ではないかと判断して対策を考えた。参加者は沖の小島まで、集団で泳いで往復する。泳いでいる生徒の集団の周りをボートを配置して見張りをする。見学者は海岸で特別訓練だと称して担当の先生方が指導している。私は先頭のボートに乗って生徒の状態に目を配った。

遠泳訓練が終わって、生徒全員が集合したところで、私が生徒達の前に立った。

「小島までの遠泳、ご苦労であった。学校からとは違う道を帰ります。十分に気を付けて帰るように。見学者は参加者と一緒に帰す訳にはいかない。その場に残りなさい」

参加者が帰るのを待ってから、見学者に告げた。

「今日は水泳訓練をしました。訓練とは「ある能力、技術などを十分に身につけるまで、繰り返し練習させることです。」分かりましたか。１２時までには未だ１時間あります。訓練です。１２時まで、先生方の指導を受けなさい。担当の先生方、お願いします」

明くる日の見学者は数名だった。

　農業経営高校へ、平成８年４月１日に赴任した。

　理不尽な事を言い張る親も指導しなければならない。その最たる例を今年の４月１日、「偶然Ｙさんに出会って」と題して詳しく書いた。今日は、その例は省略する。

　赴任早々、事務長さんから、「電気代が多くて困っています。何とか節電しないといけないのですが」と相談があり、拓心寮の寮母さんと栄養士さんからは「残飯が多くて困っています。いくら注意しても効き目がないんです」と訴えられた。

電気代の方は直ぐに片付いたが、残飯は難題だった。

　学校の職員・来賓便所は窓が無く、入口の明かりが僅かに差し込んでいるだけで、相当に暗い。その暗いままで私が用を足していると、４月に採用になったばかりの新任の先生が入口のドアを開けるなりスイッチを入れた。点灯した瞬間に私が大声で、

「児嶋さんは、電気を点けなションベンが出んのか」

と言い放った。児嶋さんはびっくりして、

「校長先生、居たんですか。すみません。消します」

と言いつつ、スイッチを切って私の横に並んで用を足した。

　児嶋さんは、職員室へ帰って、他の先生方にこの話をしたようだ。それを聞いた先生方は授業に行って生徒達にこの話をしたらしい。たちまち全校生に広がり、これがきっかけになり節電が実現したのだった。

　考えてみれば、私一人でも先ずは節電しなくてはと、電灯を点けずに用を足していたところへ児嶋さんが入って来た。だから、児嶋さんがスイッチを入れた瞬間にあの言葉が出たのだと思う。考えて出る言葉ではない。

　最後に難題だった残飯問題も、１年７ヶ月かかって遂に解決した。

　ダチョウの雛２羽を赴任した年度の２月にアメリカから輸入して育て、成鳥にして秋の収穫感謝祭で解体して全校生で食べた。雛から１５０キロの成鳥へ、畜産経営科の生徒が飼育係だ。愛嬌をふりまくダチョウは、全校生の人気者になった。私も毎日のように見に行って、指を噛ませてあぜって遊んでやった。私が広い飼育場の脇へ行って、「おーい」と手を上げると、２羽が我先にと走って来た。放課後など、２羽に両手の人差し指を噛ませて遊んでいると、直ぐに大勢の生徒が集まって来た。

いよいよ収穫感謝祭、全校生が輪になって見守る中、教師代表２人と生徒代表２人が飼育ケージに入ってダチョウを捕らえ、運動場へ連れて来て、金槌で頭を叩いて脳震とうで気絶させて屠殺(とさつ)した。血抜きをした後、畜産加工室へ運び、畜産経営科三年生全員で解体実習。歩留(ぶど)まり３５・７％、１人当たり１５０グラムの鮮やかなピンク色の肉を全校生が運動場で、爽やかな秋空の下、各種野菜や豚肉、牛肉と一緒に鉄板で焼いて食べた。

私は会食を始める前に、全校生に話した。

「皆さん！ひょうきんで人気者であったあのダチョウを今から食べます。食べるとは、命を食べることです。ダチョウの元気な姿を思い浮かべ、冥福を祈りながら心していただきましょう」

「残したらかわいそうだよ」「美味しくいただかないとダチョウに失礼だよ」と言いながら涙を浮かべて食べている生徒も居た。

これは素晴らしい実践であったと今も自負している。この行事の後、生徒の態度が良い方向へ確実に変わった。寮の残飯も殆ど無くなった。難しかった残飯問題が、１年７ヶ月かかってやっと解決したのだった。　（令和７年８月１日）